

再犯防止実態把握調査概要（平成30年8月27日調査時点）

区分	ケースについて	地域との関わりについて	支援体制等について	課題等
障害福祉分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援内容を具体的に表現・共有する必要</li> <li>・障害受容の問題。わかっているけど認めたくない。いじめ体験が背景にあるのでは。</li> </ul> <p>（うまくいくケース）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・周りのみんなの頑張りに触発される子ども</li> <li>・困り感を抱えた子ども</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・支援者の中で誰か一人でも本人が信頼できる人がいると、何年かかってもつながっていく。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・受入施設が単独で解決を図ることは困難</li> <li>・（発達障害）家族が通報できない時の近所との事前調整</li> <li>・（高次脳機能障害）医療・福祉関係者にもまだまだ啓発がいるところ。</li> <li>・地域自体が疲弊して受け止めきれない社会となっている。</li> <li>・とりあえず「働く」（つなぎとめる）ことと支援チームづくり。</li> <li>・地域における課題・役割を地域と共有できれば強い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・システムも大切だが、システムを動かすのは人</li> <li>・支援者も「しんどい」と言える場や機会の保障</li> <li>・相談できる拠点があればと思う。</li> <li>・司法関係者が障害に気づけるポイントの発信</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どういう社会復帰かイメージするため、<u>他分野と議論する場が必要</u></li> <li>・研修体制の整備</li> <li>・市町の計画策定へのサポート</li> <li>・事業所が触法ケースを受け入れるにあたり、負担の軽減と分かち合える仕組みや文化が必要。</li> <li>・チャレンジと失敗の保障</li> <li>・グレーゾーンの人などに使える制度がない。使い勝手がよいようにもう少し緩いシステムになればよい（<u>のりしろを広げる</u>）</li> </ul>
高齢福祉分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知症の高齢者が支払い忘れ等で結果的に万引きとして警察沙汰になることがある。</li> <li>・日中の過ごし方に問題があるケース。依存症、やることのなさ。</li> <li>・環境を整えると落ち着くのに、そこまでたどりつけない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>チーム支援が必要だが、共有が難しい。</u></li> <li>・決まりごとで動けない。枠を外すやり方が必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・行政がなんとかするという考え方は地域の自主性が下がる。</li> <li>・専門職がいけないといけない条件は将来的に厳しい。地域住民がシンプルにできる構図がよい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域住民が「我が事」として捉えられるしかけ</li> </ul>
児童福祉・子ども若者支援分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・万引きを繰り返す子の親には、必要な支援を受けないまま親になってしまったケースが多い。</li> <li>・大人の便利な方法として「排除」を選択していないか。</li> <li>・施設につながっていない子が多い。人生の年齢まるまる傷ついてきた子が多い。</li> <li>・「育て直し」より「自立支援」（自由と責任）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども若者支援地域協議会において、初めて「連携」を実感できた。<u>事例検討の反復により、顔の見える関係</u>となった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・即実践で対応を求められる厳しさ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>繋がらなかったケース、気になるケースのフォローの仕組み</u></li> <li>・<u>分野を超えての情報共有</u></li> <li>・うまくいったケースの振り返りと共有</li> <li>・職員、スタッフのサポート体制</li> </ul>
困窮者支援分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出所後、窓口に来るまでに本人に関する見立てがあれば、支援方針がたてやすい。</li> <li>・救護施設が触法ケース対象者への支援ノウハウを一番持っているのではないか。</li> <li>・未決勾留中に弁護士から相談が入るケースあり。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日中活動支援としてサロンやボランティアセンターがある。居場所、浪費予防、役割、やりがいにつながる。地域の包括力が試される。</li> <li>・地域で受け止めきれない時の専門職の必要性</li> <li>・シェルターから居宅を目指す人が多いので、家探しに関する情報は普段から入ってくる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・孤立防止を目指すには地域住民の理解が必須（啓発に力を注ぐことが大前提）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>支援者が困った時に相談できる窓口</u></li> <li>・<u>本人や家族の同意がなくても情報交換できるような場や仕掛けが必要。</u></li> <li>・年齢や障害などの条件などで線をひかない地域の誰もが相談できる、通える場所</li> </ul>
依存症支援分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退所後の関わりが大切。一生の問題。イベント案内をして付き合いが切れないようにしている。</li> <li>・生活が保障されているのに不安という、自身がおかれている状況と感情の矛盾に気付い</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族のような単位で困難を解決する力を身につけることを目指すため、一戸建てが良いと考えているが住民理解が得られない。</li> <li>・入院から地域移行を図る際、ギャップが大きい。その間の支援が必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<u>職員がバーンアウトしやすい。</u>職員にスキルや資質が求められる。</li> <li>・職員、スタッフも当事者。当事者だからこそ言えること、分かることがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・何度失敗しても見捨てない、受け止められる社会づくり</li> </ul>

	<p>た時に初めて「どうしたらいい？」と聞くことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小学3年生頃から芽が出ているはず。被害が加害に転じる時期があるはず。</li> <li>・ 古い感情、古い人間関係、古い思い出を断ち切る必要がある。</li> <li>・ つながる人は「どん底体験」を経験している人。</li> <li>・ 共依存していることから親離れ、子離れのプログラムが必要。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 再使用に至るまでの本人の努力を評価できるかどうか。再使用の結果のみしか見ていない。</li> </ul>		
法律関係分野	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 起訴猶予、執行猶予となる見込みのケースについては、生活環境調整（住まい確保や保護申請等）は弁護活動の一環</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「再犯防止」ではなく、地域の問題として自分事としてイメージが持てる言葉が必要</li> <li>・ ダルクのように分かり合える仲間がいて、コーディネートする職員がいて、居場所があるといったコミュニティが必要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心ある、関心がある弁護士を募っていく、増やしていくかたち。</li> </ul>	